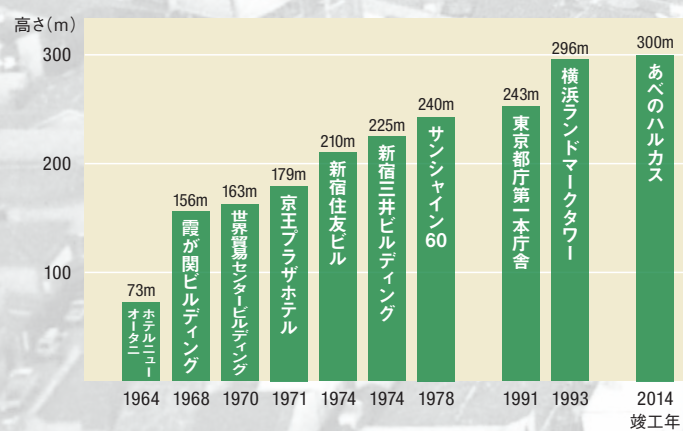


# ランドマークの再生

ランドマークには旅人が目指す「目印」という意味がある。その土地ごとの道標を目指しながら旅路を巡る。旅を終えたときには見慣れたシンボルが迎ええてくれた。そのランドマークも時代とともに新たな役割を担い、生まれ変わっていく。目立てばいいというわけではない。歴史をまとうていれはそれだけで価値があるというものでもない。新たなランドマークの再生を通し「道しるべ」の意義を探ってみよう。

1912年に建設された通天閣。建設当時は東洋一の高さを誇っていた。1943年に火災で消失したが、1956年、市民の声に後押しされ、再建された。現在も変わらず、大阪を代表するランドマークとして親しまれている。写真は1966年の通天閣と新世界。（提供：読売新聞社）

「日本一高いビル」の推移



日本では、1968年の霞が関ビルディング完成を始まりとして、超高層ビルが次々と建設され、日本一の高さも次々と更新されてきた。今年竣工したあべのハルカスは300mに達している。これらの超高層ビルは、都市のなかにあるわかりやすいランドマークである。その土地を代表する建物として広く認識され、地域のシンボルとして開発や発展を牽引していくことも多い。



# あべのハルカス

「阿倍野の街を盛り上げる  
「日本一」のランドマーク

通天閣から眺めた、「あべのハルカス」と阿倍野、天王寺の街並み。日本一の超高層ビル建設計画は、築後70年を迎えた近鉄百貨店阿倍野店の老朽化対策、耐震強化から始まり、2014年に完成した。新たなランドマークは、周囲の施設と共存しながら、「暮らしの街」阿倍野、天王寺エリアを盛り上げていく。

## 大阪南側の 新たなゲートウェイ

今年三月、大阪市阿倍野区に新たなランドマークが誕生した。「あべのハルカス（以下、ハルカス）」。

横浜ランドマークタワーを抜いて日本一の高さを誇る超高層ビルになった。地上六〇階、三〇〇メートルのビルは百貨店、オフィス、ホテル、美術館などを擁する巨大な複合施設である。

梅田駅周辺のキタ、その南約四キロの難波駅を中心とするミナミはオフィス街、商業エリアとして発展している。さらに南へ約二キロの阿倍野、天王寺駅に大阪の南

の玄関口を構築する。構想のシンボルとなったのがハルカスだ。デベロッパーは近畿日本鉄道(株)。竹中工務店を中心とする共同企業体が施工を担った。「ハルカス」という名称は平安時代に書かれた『伊勢物語』の一節にある「晴るかす」からとったという。「心を晴れ晴れとさせる場所になってほしい」という想いが込められている。六〇階の展望台からは大阪平野が一望でき、晴天時には京都から六甲山系、淡路島までを見渡せる。

古き良き大阪の風情を色濃く残す阿倍野の新ランドマーク。訪れる人々の表情には一様に晴れやかな笑顔が満ちている。

## かつてのランドマーク 近鉄百貨店阿倍野店 (1937~)

1937年、大鉄百貨店として開業し、後に近鉄百貨店となる。社会の発展や、街の変化に伴い、規模を拡大しながら営業を続けてきた。近鉄大阪阿部野橋駅、JR・地下鉄天王寺駅の駅前に位置する近鉄百貨店阿部野店は、地域のランドマークであり、「あべさん」とよばれて親しまれた。現在はあべのハルカスの核施設として「あべのハルカス近鉄本店」と名称を変更し営業している。



開業時の大鉄百貨店 (提供: (株)近鉄百貨店)





Renewal & structing

左手が「ウイング館」、右手がハルカス直下の「タワー館」。両施設は「ウエルカムガレリア」という吹き抜け通路で結ばれている。



58～60階は3層吹き抜け構造の展望台「ハルカス300」。58階はウッドデッキ、そのさらに上層の60階がガラス張りの展望フロアになっている。

百貨店「ウイング館」の屋上部は「空の広場」として開放。併設する貸菜園「あべのハルカスファーム」やカフェテラスなどが近隣市民の憩いの場となっている。



グランドオープン時には多くの市民が集い様々なイベントが行われた。隣接する商業施設であるキューズモールも「キューズモールはあべのハルカスが大好きやねん!」というアドバルーンを上げてくれたと能美課長は笑顔を見せる。(提供：近畿日本鉄道株)



「ビジネス」の街キタ、「遊び楽しむ」ミナミ、そしてアベノは古き良き大阪の風情が残る「暮らし」の街だ。その第三極のゲートウェイとして「あべのハルカス」が誕生した。

## 大阪の「第三の核」阿倍野の中心となる施設

歳月を経て竣工したハルカスのキワードは「連携」だ。周辺地域、商店会、行政との連携、協力が無ければ実現が難しい計画だった。「あべのハルカスは阿倍野という『エリア』に人を導くための施設です。目的が同じなら対立要素はゼロ。施工時からオープン後まで地域全体の協力体制は非常に強いものがあります」。オープニングイベントには関係者や地域の小学生が集い、テープカットを行った。街をあげて完成を祝福する催しだ。展望台から吹き抜けを使って通したテープを、周囲の商業施設までつなげた。その長さは約三、〇〇〇メートルに及んだという。

展望台、ホテル、オフィス、美術館、百貨店が入居する複合施設であるハルカスでは、施設内における事業間の連携も重要になる。「先日、展望台で挙式、ホテルで披露宴と宿泊、百貨店のレストランフロアで二次会のパーティーといった結婚式を実施しました。今後とも引き続き施設の機能を連携させて新しい企画を提案していきたい」と、能美課長は抱負を語る。

### 地域との協働、事業間の連携

「大阪のキタは働く街、ミナミは遊び、楽しむ街。阿倍野は昔から『人々が暮らす街』です。都会のエッセンスを包含しながら日常的なエリアであるこの地域の、新たなランドマークとして生まれたのがあべのハルカスです」と語るのは近畿日本鉄道株の能美慎次郎課長だ。

計画が始まったのは二〇〇六年秋ごろのことだ。近鉄百貨店阿倍野店の建て替え計画に端を発している。「その翌年に航空法が改正され高さ制限がなくなりました。それならば三〇〇メートル。日本一の超高層ビルを建てようとなったんです」と能美課長は明かす。法改正が追い風となり、結果的に「日本一高いビル」の建設計画となった。二〇一〇年三月に着工、四年の



近畿日本鉄道株  
あべのハルカス事業本部  
事業部 課長  
(営業推進担当)  
**能美慎次郎**



# 高さ日本一を実現する難工事

## 大都市で展開する巨大現場

施工にあたって最も配慮したのが「安全、安心な工事」だった。能美課長はこう語る。「鉄道事業者ですから当然のことではありますが、公共の安全が最優先になります」

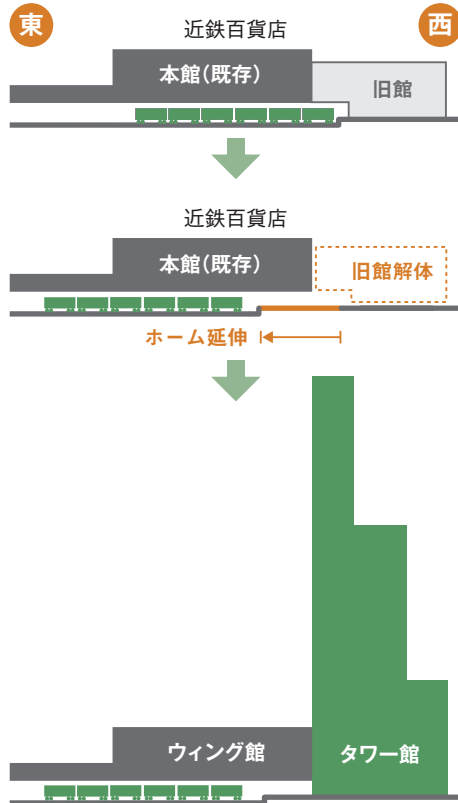


阿部野橋  
ターミナルビル整備工事  
竹中工務店・奥村組・  
大林組・大日本土木・  
銭高組 共同企業体  
総括所長

山和生

す。地域の皆様に対する安心感も重要な課題になりました」。敷地は、渋滞する道路と五路線の鉄道に包囲され、ターミナル駅だけあって人通りは絶えることがない。

「安全」というテーマは施工現場において、竹中工務店を核とするJVに委ねられた。山和生総括所長に聞いた。「所長を拝命したとき大阪市北区にある三ーの自社ビルを見上げ、この一〇倍かと想像して身が震えました。しかし、そこにやりがいがある。とに



タワー館を建設するため、最初に駅のプラットホームを東へ30m延伸。その後百貨店旧館内に位置していたコンコースを東側に移設し、旧館の解体工事に着手。工事の進捗にともない、通路の切り替えを繰り返し、常に旅客動線と百貨店利用者の動線を確保しながら工事を進めた。(提供：(株)竹中工務店)

かく安全でいいモノを造ろうと取り組んできました」。

施工は近鉄大阪阿部野橋駅のホームを東へ約三〇延伸する鉄道工事から始まった。終電から始発まで四時間が勝負となる。これだけでも難工事だ。百貨店の営業を継続しながらの施工も課題になった。「旧館と呼ばれた西側の建物を解体するため東側の本館の機能アップさせる工事も並行して行いました。建物は生き物です。電気、ガス、水道などインフラの維持は欠かせません。既存建造物の改修工事も六年間継続したことになりますね」と山和生総括所長は語る。さらに、三〇延伸という、これまでになく高さのビルの新築工事。上空の強風への対応をしながら、超高層部でも安全に環境に配慮して工事を進めることができるよう、細心の注意を払った。現場は二四時間体制で展開した。

## 心の中のシンボルタワー

山和生総括所長はブランドオープンの後もしばらく緊張が解けなかった。それだけ巨大かつ繊細な現場だ。「どこかに使い勝手の良くないところが出てくるのではないかと、達成感よりも緊張感が先に立ってしまった」。一カ月経ってようやく心が落ち着いてきたと笑った。続けて、ハルカスはビルを建てるというより街を創る発想に近かったと振り返る。「発注者、施工者、地域の皆さんが一体となり、六年間かけてカタチにしてみました。ハルカスは近鉄さんをはじめ施工に関わった延べ一〇〇万名の作業者、地域に暮らす人々の心の中に建つランドマークなんです」。

かつてハルカスの敷地には、

「あべきん」と親しまれた近鉄百貨店阿倍野店があった。生鮮品売り場は夕方ともなると連日大変な賑わいを見せた。その活気はハルカスの地下フロアでも変わることがない。しかし、装いを新たにしたランドマークは従来の機能を何倍にも拡張して人々を迎え入れている。「『あそこ』に行けば何かある。と人々に思っていただけのような施設でありたい」近鉄の能美課長はそう話す。ハルカスはモノとコト、そして人々の心の集積回路として成長していくことだろう。その可能性は無限大だ。



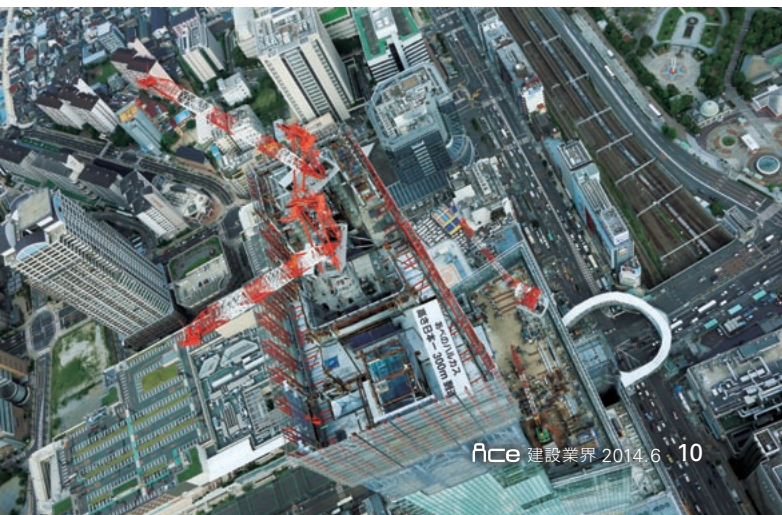
「ハルカス300」のウッドデッキでは上空300mの空気をゆったりと体感しながら、大阪の街を眺めることができる。晴れた日には京都市街から六甲山系、淡路島や関西国際空港までを一望するまさに「天空庭園」だ。



見上げるだけで爽快感が満ちてくる。心を「晴るかす」ランドマークだ。

Renewal & structing

人通りが絶えない都市部での施工は「安全第一」が至上命題だった。工事のゲートが1カ所限られた敷地。100mごとにセットバックする建物形状を活用し、資材や重機のヤードを低層部の屋上に設けて1階のヤード不足を補った。(提供：(株)竹中工務店)





# 万世橋駅の再生

## マーチエキュート 神田万世橋

鉄道遺構を、歴史を伝える  
ランドマークに再生

### 閉鎖されたターミナル駅

新しいランドマークのトピックスでは東京も負けてはいない。大阪「あべのハルカス」のグラインドオープンに先んじて、昨年九月に開業したのは神田須田町の「マーチエキュート神田万世橋」である。古くからの電気街、クールジャパンの発信地として世界に名を馳せる秋葉原。そこからほど近いJR中央線の神田、御茶ノ水駅間の高

架橋を商業施設として再生した。レンガ造りの構造物はかつての「万世橋駅」の遺構だ。

一九一二年、この地に万世橋駅が開業し、東京市電の乗り換えターミナルとして繁栄する。駅舎の設計は東京駅を手がけた辰野金吾、赤レンガの壮麗な建造物は食堂や待合室を備えた新名所となった。この初代駅舎は一九二三年の関東大震災で焼失、残存した基礎の上に二代目駅舎が完成したのは一九二五年。一九三六年に鉄道博物館が併設されるが、次第に利用者が減少し、一九四三年には万世橋駅は休止駅となり、営業を中止する。その後、残った施設は交通博物館として七〇年の永きにわたる鉄道ファンを魅了したが、ここも二〇〇六年に惜しまれながら閉館した。

以来、エキゾチックなアーチはコンクリートで補強され、中央線の軌条を支える高架橋としてのみ機能してきた。この遺構が時代に則したコンセプトで息吹を吹き込まれ、新たなランドマークとして再生した。

およそ100年前の鉄道遺構、万世橋高架橋が神田のランドマークとして再生。この貴重な構造物を最大限に活かしながら神田の街を知ってもらいたい。想いを一つにした嗜好性の高いショップが集まり、かつてない商業施設になった。

Re<sup>newal</sup> &  
str<sup>ucturing</sup>

### かつてのランドマーク

#### 交通博物館(1936~2006)

入り口の新幹線0系とD51形蒸気機関車が誰もが知るシンボルだった交通博物館は、1936年に、鉄道博物館として開館。施設老朽化などの理由で閉館するまでの70年間、鉄道ファンだけでなく、子どもたちや周辺住民にも親しまれた。これもまた神田、秋葉原のランドマークだった。

閉館直前の交通博物館(提供: 東日本鉄道文化財団)





## 七〇年の時を超えた サロンとして

開発プロジェクトにJR東日本、東日本鉄道文化財団とともに名乗りを上げたのが(株)JR東日本ステーションリテイリングだ。「エキナカ」の商業施設を数多く開発、運営してきた。マーチエキュート神田万世橋の内田尚壯店長に事業について伺った。「二〇〇六年に閉館した交通博物館は地域のランドマークでした。JRでは閉鎖後の開発の方向性を検討していたのですが、そんななか、周辺地域の方々の声に耳を傾けたところ、『新しいシンボルをつくってほしい』という要望が寄せられました。神田の街をもっと知ってもらいたいという声を取り入れて始まったのが、この開発事業です」。

見所は世紀を超えて公開された歴史的な遺構の数々だ。開業当時の姿を留める「一九二二階段」。駅の休止とともに閉鎖されたホームへのアプローチ階段が七〇年の時を経て蘇った。「一九三五階段」は博物館の新館建設にともない後から設置された階段だ。二つの階段を比較すると、タイル目地や階段の仕上げが異なり興味深い。上層階の旧プラットホームはオープンエアのデッキ、カフェとして整備され「二〇」「二三プラットフォーム」と名付けられた。北側に見える電車留置線の跡が往時を偲ばせる。

土木建築の見地からも歴史的価値が高い遺構の一階・二階には、訪れる人の好奇心を刺激する一一のショップが軒を連ねた。流行の店舗を集めたというより、確固たるコンセプトを持つ専門性の高いショップで構成されている。ワイン専門店「ワインをもっと気軽においしく愉しんで、ワイン好き



施設の周辺にもこのエリアの歴史が残されている。交通博物館入り口に置かれていた新幹線とD51のレールが、同じ場所に埋め込まれている。

初代駅舎開業時から使われていた「1912階段」(下)と、鉄道博物館の新設にともない新たに設けられた「1935階段」(左)も70年ぶりの公開。タイルや装飾など、当時のままの姿を見ることができる。1935階段途中に設けられたタッチパネルを使ったデジタルコンテンツ「MANSEIBASHI ARCHAIVES」は歴史資料の宝庫だ。



になっていた」というコンセプトを掲げ出店。日常のシーンで楽しめるワインスタイルを提案している。フラワーショップはバラに力を入れる。「二本のバラのブーケ「ダズンローズ」が自慢だ。内田店長はショップの共通点をこう語る。「マーチエキュート神田万世橋のコンセプトに賛同するショップに集まっていただけでした。新しい価値を発信していくという志を持ったお店ばかりです」。

そのコンセプトとは「万世橋駅サロン」という立ち位置だ。プロジェクトは万世橋駅の歴史をひもとくことから出発した。「大正期には多くの文化人が万世橋駅の食堂に集い、情報交換や活発な議論を繰り広げていたと聞いています。当時の佇まいを残しながら社交場、談話室的な機能を受け継ぎ、連鎖的に情報が受発信できる施設を目指しています」と内田店長は話す。施設内には耐震補強の必要から部分的にコンクリート打設を施したが、天井、壁面などには極力手を加えずにそのまま公開。そのため照明はアッパースタイルを活用し、

ショップに並べられた家具、食器、布製品などのグッズはどれもこだわりを感じさせるものばかり。(左)。かつてプラットホームがあった上層階のカフェ。自然光がふりそぐ店内でコーヒーを味わいながら、すぐ横を疾走するオレンジラインの中央線の勇姿を堪能することができる(下)。



内部も極力当時の構造をそのまま残した。その外側、神田川沿いにオープンデッキが新設され川風を感じながらつかの間の散策気分を味わえる。

## 七〇年ぶりに公開される 旧万世橋駅、 交通博物館時代の遺構

空調機は床置き型を採用するなど工夫を施した。「神田を象徴する貴重な建物です。これを未来に残すという使命感をもって運営していきたいですね」。

### 地域とともに創る

下町というと少々閉鎖的なイメージがあるかもしれない。しかし

内田店長の印象は違う。「神田はそうじゃないんです。私たちの提案に真摯に耳を傾けてくださいますし、意見も率直に述べていただきました」。マーチエキュート神田万世橋は地域との交流を深めながら生まれた施設だと言う。

昨年の七月下旬から約一カ月間、プレオープンイベントとして神田





## 万世橋に 再び灯りがともった



「LIBRARY」に展示されている開業当時の駅周辺を再現した精巧なジオラマ。銀座に比肩する賑わいを見せていたという万世橋駅周辺の様子がよくわかる。



※ポスター・写真は2013年開催時のもの（提供：㈱JR東日本ステーションリテイリング）

神田麦酒祭りは今後は地域の活性化イベントとして定期的な開催が期待されている。「ビアアーチ」は神田の夏の風物詩になるかもしれない。



万世橋の夜に再び灯りがともった。高層ビルに囲まれたレトロな佇まいが唯一無二の新しいランドマークだ。

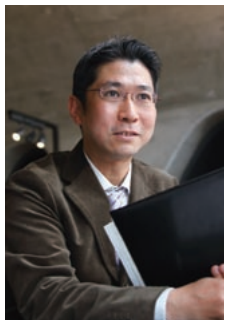
麦酒祭り「ビアアーチ」が開催された。かつて神田界限に数多くあったといわれているビアホールに想いを馳せ、赤レンガの歴史ある雰囲気とビールを楽しむながら神田の街を知る催しだ。昨年は会場でプロジェクトなどを使って神田の歴史を紹介し、街の魅力を積極的にアピールして、隣接する商業施設や、有名レストランと連携して多くの来場者を集めた。また今年二月に行われた「神田シャルソン」は神田界限を自由に走り回り、商店主との対話や散策を通して街の魅力を発見するソーシャルマラソンだ。参加者はゴールのマーチエキュートで、集めた情報を交換、ブログなどで神田の街を次々と発信した。

### 「あり続ける」街の象徴

内田店長は「この施設は『モノ』

だけではなく『コト』を創出、発信する場でありたい」と意欲を見せる。たくさんのお客さんに来ていただくためには地域の協働、共存意識が不可欠だと言う。「周辺地域の方々からは『交通博物館が無くなって寂しくなった万世橋に再び明るい灯りがともった』という嬉しい声を寄せていただきました。『神田』と言えばマーチエキュートと言われるくらい認知度を高めていきたいですね」。一度もしたランドマークの灯りは消すわけにはいかない。

夕闇に浮かぶアーチを眺めながら、日常会話の中で「ランドマーク」という言葉が使われるようになったのはいつ頃のことか考える。それ以前から、例えば「東京タワー」は今でも間違いなく日本の首都を象徴するランドマークだ。いつの時代にあっても人はランドマークを求めてきた。それは東京タワーが戦後復興の精神的シンボルであったように物理的な構造物に留まらない。存在意義を進化させ、再生しつつ厳然とそこにあり続ける「道しるべ」なのだ。



株式会社JR東日本  
ステーションリテイリング  
マーチエキュート  
神田万世橋 店長  
**内田尚壯**